

後楽園のわき道みどりまっさかりマスク外して息を  
たのしむ 宇都宮とよ

下旬「マスク外して息をたのしむ」というフレーズに  
感心した。とくに「息を楽しむ」は。簡潔かつふだんのうっ  
とうしさを反映して見事。前後の歌から見て、ここは岡  
山の後楽園ではなく、東京の小石川後楽園のようだ。

ラマダンの明けた日没、食事する息子一家の写真が  
届く 谷岡亜紀

作者の息子さんは、インドネシア人の美人のお嬢さん  
と結婚されたと聞いている。イスラム教徒はラマダンの  
あいだ日の出から日没にかけて、一切の飲食を断つらし  
い。日没後のほっとした時間の家族写真。

青空に一本の白線戦闘機あんなところに働いている  
人 青木泰子

上空を飛ぶ戦闘機を見上げての一首だが、戦闘機のパ  
イロットをさして「働いている人」と表現していること  
に、「えっ」と思った。確かに空軍の一員として働いて  
いる人にはちがいないのだが。

「宦官」や「北朝鮮」の手話覚えきつと使はぬ言葉  
の貯金 山本絳人

知っていても使わないボキャブラリーを私はどれぐら  
い持っているのだろう、そんなことを考えさせられる。  
そう言えば私も「宦官」という語は一度も使ったことが  
ない。そんな使用するあてのない言葉を「言葉の貯金」  
と表現して見せた意外さに注目する。

銭湯の団扇昭和の面影と小林亜星偲びて仰ぐ

## 短歌の現在

No.485

## 今月の15首を読む

### 佐佐木幸綱

久松宏二

「銭湯の団扇」が序詞になっていて、「昭和の……」を  
導き出す役割をはたしているようだ。意味としては、昭  
和の面影である小林亜星さんを仰ぐように追悼する、そ  
んな意味になろう。序詞という現代短歌に縁遠い修辭  
も、かえって挽歌らしくていい、そんな気がする。

隣人が壁に頭を打ちつけている音響く夏の浴槽

安野ゆり子

「隣人」は、ここがどこであろうと謎の存在である。  
アパートでも、車中でも、現代社会ではどこにも隣人が  
いるけれど、どこでも謎の存在と見ていいだろう。謎の  
存在を謎のまま一首に登場させた一首。

思ひ出は日にけにとほく此処に咲く振花よあはれ我  
が恋ふるひとよ 山本陽子

本田一弘「選者ルーム」が指摘するように、古典和歌  
を思わせる風雅な空気を取り込んで、独特の相聞歌を実  
現している。「振花」は「百人一首」の「みちのくのし  
のぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」(源  
融)の「もぢずり」と同じ花。

砂を巻き海へ湧き出る白神山の伏流水に月影揺るる

加賀谷実

山からの伏流水が海に湧き出るといふ地球規模の水の  
循環に月を配置して、スケールの大きな自然詠にしあげ  
ている。白神山はとくに伏流水が多く、また飲んでもお  
いしいことで有名。

全員にトリケラトプスの真似をさせ息子は家を白亜